

# 「荒野の死」の歴史的現実性とエウセビウスの『教会史』

吉門 牧雄

(人文学部国際コミュニケーション学科)

## The Historical Reality of "A Death in the Desert" and Eusebius' *The History of the Church*

Makio YOSHIKADO

(Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics)

キーワード：ブラウニング「荒野の死」の歴史性、エウセビウス『教会史』、高等批評

ロバート・ブラウニングの「荒野の死」(1864年)はダーヴィッド・シュトラウスやアーネスト・ルナン等の聖書の高等批評に対する応答として書かれたものと言えるが、この作品は極めて歴史性豊かな要素を持っており、その歴史性を醸し出す多くの装置が散りばめられている。<sup>1</sup> 本論ではこのような歴史性現実性を付与する工夫がどのようになされているかを明らかにしたいと思う。

まず、この詩の書き出しの部分から考察を始めよう。

[アンテオケ人パンフィラックスの手によるものと考えられる。

それは羊皮紙写本で、私の巻の第五巻だが、全てはギリシャ語で書かれ、エプシロンの項からミューの項まで続いている。

それはテレピン油で着色され保存されて、「選ばれた櫃」と称される箱の二番目に置かれている。

その櫃は髪の毛の布で覆われ、クシーという字がついている。

その字は、今は天国で安らかに眠っている私の妻の叔父クサンサスからとったものである。

ミューとエプシロンとは私自身の名を表している。

私はそれが書けないが、他の者と共に、主が来臨を待っていることを示すために十字架の印を書く。

そして、ここで話を終える。パンフィラックスはこう始める。]

(1-12)

この短い書き出しの中に、多くの情報が存在する。まず、この個所で特徴的なことは、言及されている羊皮紙写本についての描写が極めて具体的で現実的である点である。つまり、この写本は、現在の所有者が持っている写本の「第五巻」であり、全てギリシャ語（これは新約聖書が書かれた言語である）で書かれており、エプシロン(ε)からミュー(μ)までの項(コラム)がある。つまり、書き出しの部分は失われて途中から始まっていると思われる。これは、それぞれの項に順番にアルファベットが付されているとすると、第五項から第十四項まで、ギリシャ数字として使われているとすると、第五項から第四十項までを意味する。さらに、それは「選ばれた櫃」と称される箱の「二番目」に置かれていて、そこには、クシー(ψ)という字が目印として付いている。それ

は写本所有者の妻の叔父であるクサンサスの頭文字である。このように見てくると、写本の記述は非常に具体的で歴史的現実性を帯びたものに思える。

だが、この写本の著者という点になるとたちまち不確定性が増してくる。つまり、この部分の語り手は、この写本の現在の所有者であることは間違いない。その所有者が、語り手‘I’として登場し、写本について説明するが、彼はまず「アンテオケ人パンフィラックスによると考えられる」(‘Supposed of Pamphylax the Antiochene’)と語り始める。当時、小アジア地方にはシリアのアンテオケとピシデアのアンテオケという二つの重要な町が存在したが、そのどちらかの住人であったパンフィラックスによるものという。この文脈で‘of’は‘by’を意味する。しかし、ここに二重の曖昧性が存在する。パンフィラックスによるとというのは、彼によって書かれたものなのか、あるいは、彼がそこに書かれた内容を口述して、他の筆記者が書きとめたものなのかがはっきりしない。「パンフィラックスがこう始める」(‘beginneth Pamphylax’)とあるのも、パンフィラックスがこう書き始めるとも、こう話し始めるともとれる表現である。

このような曖昧さが生じるもう一つの理由はこの詩の後半部分にある。それはこの詩の後半で老ヨハネの独白が終わり、パンフィラックスと思われる人物の語りの部分である。

しかし、彼は死んだ。それは正午ごろで太陽が幾分傾きかけていた頃だった。

私たち五人はその夕べ、彼を埋めた。

そして、それから分れて五人五様の道をたどった。

そして、私は、変装して、エペソへ戻っていった。

(643-46)

つまり、パンフィラックスらは師ヨハネの亡骸を荒野のどこか(彼らが隠れていた洞窟の中かも知れない)に埋葬し、そこで五人の弟子達は分れて、それぞれの場所に行った。その五人というのは、パンフィラックス、クサンサス、ヴァレンズ、少年、バクトリア人であった。パンフィラックスは迫害がまだ続いているので変装して、エペソに戻った。そして、彼の話はなお続く。

この時までに洞穴の口は砂で一杯になっているのに違いない。

ヴァレンズは失われた。私は彼の足跡を知らない。

バクトリア人は野性的で子供っぽい男に過ぎないので、書くことも話すこともできず、ただ愛するのみだった。

それで、この記憶がすっかり消え去ってしまわないように、

私は明日には獣と戦うことを考えて、私はそれをフィーバスに語る。

彼を信ぜよ。

(647-53)

ここでは、パンフィラックスがエペソに戻ってから一定の時間がたってから、彼が仲間たちの行方について語っている。ヴァレンズは行方不明になり、バクトリア人の改宗者は書く力も語る力もなかった。また、クサンサスについてはこの詩の前半に、「ローマに逃亡し、火に焼かれ、記録を書きとめられなかったのはこのクサンサスである」(56-7)と記されているように、クサンサスはヨハネを埋葬した後、ローマに逃れたが、捕らえられて火刑に処せられてしまい、ヨハネの最期の記録を書きとめることが出来なかった、と思われる。それで、残るのはヴァレンズと少年だけになるが、彼らの後日談は語られていない。そして、パンフィラックス自身も、明日には円形闘技場で

獣と戦わされる運命にあるので、フィーバスという人物にヨハネ独白の記憶を語った。フィーバスに口述したということは、決してパンフィラックスがヨハネ独白を書きとめたことを否定するものでない。彼がヨハネ独白の筆記者であるとともに口述者でもあった可能性はある。写本だけでは、それが何らかの理由で失われたり、奪われたりすれば、ヨハネ独白の記憶は永遠に失われる危険性が高いから、大事を取ってフィーバスにも語ったとも考えられる。こうして、この写本の著者については、パンフィラックスがヨハネ独白をギリシャ語で書きとめたか、あるいは、彼からそれを口述されたフィーバスが筆記したか、あるいは、彼がまた他の人に再度口述し、その人が書きとめた可能性等が考えられる。いずれにせよ、どこまでいっても誰がヨハネの独白を書きとめたかは決定できない。

その上、ヨハネ独白の最初の筆記者あるいは口述者でさえ、曖昧で決定不可能である。つまり、第一行目に、それはパンフィラックスよと思われる（‘Supposed’）とあるので、彼がヨハネ独白の発信源であることさえ確定的なことでない。さらにその上、この巻物の現在の所有者に関して、その自己同一性（identity）も実ははっきりしない。ただ、この詩の冒頭の個所から読み取れるように、この所有者の妻の叔父がクサンサスであり、クサンサスは今や天国で安らかに眠っている。このクサンサスは詩中に登場するヨハネに従った五人の弟子の一人、クサンサスと同一人物と考えられるが、このクサンサスは歴史上の人物でなく、架空の人物である。もちろん、クサンサスという名前そのものは小アジア南西部リキアの別名であるとともに、ギリシャ神話に登場するアキレスの戦車を引いていた二頭の神馬の一つであって、決して馴染みのないものではなかったが、人間としては架空の人物であった。

だが一方、この人物について興味深い事実がある。すなわち、確かにこの詩の中ではクサンサスは架空の人物でありながら、詩人ブラウニングの中では歴史とある接点をあらかじめ持っていた点である。その手がかりはブラウニングの1840年の作品『ソールデロ』にある。

その第三巻の後半には次のような挿話が描かれている。

愛弟子ヨハネはアンテオケからパトモス島へ追放された時、

彼の群れの人々全体に別れを告げた。

だが、最後の晩は彼が居なくなったら、彼らがひどく悲しむだろうことを知っていた人  
たちを慰めるためにとっておいた。

その家の者たちが彼を迎える準備をしている様子は感動的な光景であった。

クサンサスの妻はそこに居なかった。

それは一ヶ月前に彼女は豹の餌食にされてしまったからだ。

（彼の甥は板の間に閉じ込められて、ばらばらに切り裂かれたが）、

クサンサス自身とポリカープと優しいカリクルとが居た。

彼らは次の年に刑車の拷問にあつてさえ、皇帝の運命にかけて誓うことを強制されな  
かった。

彼らは他の者たちと共に並んでいた。

その中を白髪の使徒は押し進み、忙しく右に左に彼の祝福を与えながら立ち止まって一  
人の幼子の巻毛を撫でたが、その子はすぐ後で絞首刑執行人に首を切られる運命だった。

そして、玄関に着いた。

蝶番の上で扉が回り、彼は中に入った。

どんな急性の激痛が口元の微笑みを台無しにし、

その大きく開いた目は何に注がれているのか。

なぜ使徒の手は、幽霊のような燭台の枝のようにになっているのか。

彼は気が遠くなって死んだようになったが、すぐに目覚め、

溜息をついて、悲嘆に暮れて喘ぎながら言った。

「サタンよ、私の後に退け。」

私が苦勞して来たのはこの目的のためか。

福音はここでも惑わされるのか。

私の息子クサンサスの暖炉の上に、煤けた服を着た黒ずんだ顔つきの人物の肖像画が掛かっている。

ああ、クサンサス、私は住みついた悪魔を見るためにあなたの屋根の下に騙されて入ったのか。

これに対してクサンサスはすすり泣いた、

「父よ、掛かっているのはあなた自身です。」

明日あなたが居なくなるのに備えて入手するために、

私たちの有りっ丈のお金が使われた絵画です！

絵の中であなたが持っているのは二股のフォークではなく、

牧師の十字架です。」

(991-1021)

この挿話の意味するところは、ジョン・グルーベも指摘しているように、「聖ヨハネ程に完全な外なる魂 (“out-soul”) に近い者であれば、人間の動機と彼自身の時代に働いている色々な歴史的力の価値について並外れた明瞭な洞察力」を持っていてしかるべきだが、ヨハネでさえ誤りはある。イエス・キリストの愛弟子として最後の晩餐に居たヨハネでさえ誤りがあるとすれば、ソールデロのような若い詩人がグエルフとジベリン、つまり、教皇派とドイツ皇帝派の複雑な闘争の渦中であって誤りを犯すのも無理はない、ということである。<sup>2</sup>

なお、ここで注目すべき事は、ヨハネが「アンテオケ」からパトモス島に追放されたとなっている点である。後で述べるように古い伝承では、ヨハネはエペソ滞在中にパトモス島へ流刑となったのであるが、少なくともここでは「アンテオケ」からとなっており、流刑前にヨハネがそこに滞在していたことが示唆されている。「荒野の死」の第一行に登場するヨハネの弟子パンフィラックスが「アンテオケ人」となっているのも、この事と関係があるのかも知れない。

さて、この挿話に関してだが、登場人物の名前や状況設定は異なるが、この話の典拠となった物語が、新約聖書外典の「ヨハネ行伝」の中に歴史的出来事として記されている。<sup>3</sup> この「ヨハネ行伝」の成立は一応三世紀の末頃と考えられるが、その中に、リュコメデスという人物が腕の良い肖像画家の友人に使徒ヨハネの肖像を描かせる話が語られている。パトモス島から許されてエペソに帰った時、エペソ人の将軍であるリュコメデスがヨハネの足もとにひれ伏して、死にかけている妻クレオパトラを癒して欲しいと嘆願する。それから、二人は彼の家に向かうが、リュコメデスは妻の寝台のところで大声をあげて泣き出し、ついには、彼自身が死んでしまう。だが、ヨハネは祈りによってまず彼の妻を癒し、ついで、リュコメデスを蘇生させた。リュコメデスは感謝して、ヨハネに彼の家に留まってほしいと嘆願すると、ヨハネは快く承諾する。ヨハネが滞在していることを聞きつけた多くの群衆が押し寄せて来たので、ヨハネは彼らに説教をする。その間に、リュコメデスは肖像画家の友達にヨハネの肖像画を彼に知られないように描いてくれと頼む。やがて出来あがった肖像画がリュコメデスの寝室に飾られた。そこに入ってきたヨハネは、そこに老人の肖像画が掛けられており、その傍らに燈明が、その前には祭壇が置かれているのに気づいて言った。「リュコメデ

スよ、こんな肖像画はいったい何のつもりだ。描かれているのはお前にとっての神々の一人なのか。私の見るところお前はいまだに異邦人のように生活している。」

これに対して、リュコメデスは、これはあなたの肖像画ですと答えるが、ヨハネは今まで一度も自分の顔を見たことがなかったので、「子よ、お前はお前の主たる私をからかうのか。私がこんな姿をしているというのか。お前はどうかってこの肖像画が私に似ていると信じさせるつもりか」と詰問する。そこで、リュコメデスは鏡を持って来て、ヨハネに見せると、ヨハネは「この肖像画は確かに私に似てはいる。だが、子よ、私にというよりも私の肉の姿に似ているだけだ」と言って、外側の姿を表す肖像画でなくて、リュコメデス自身の魂が、ヨハネと同じ「神への信仰、知識、畏敬、友愛」等を持って彼同様、主イエスに似る者になって欲しいと語る。

このように、「ヨハネ行伝」に基づく『ソールデロ』の挿話は、登場人物の名前や状況こそ違いますが、初代教会の状況を反映した歴史的現実性を持っており、ブラウニングは「荒野の死」の執筆のずっと前から、クサンサスを使徒ヨハネの弟子と考えていたようである。

だが、上記の挿話とは切り離されて登場するクサンサスはその歴史性がより曖昧になる傾向がある。すなわち、クサンサスを義理の伯父と持つ写本の現在の持ち主は自分の名前を明記していない。ただ、自分の名前のイニシャルだけを示し、「ミューとエプシロンとは私自身の名を表している。私はそれが書けないが、主が来られるのを私が他の者たちと共に待っていることを示すために十字架の印を書く」と言っている。十字架の印は普通、文盲の人が署名の代わりに書く印であるが、この場合は、話者が迫害を恐れて自分の名前を公表できないので、キリスト教徒であることの暗号として用いたのか、あるいは慎み深さから自分の名前を出したくなかったものと考えられる。<sup>4</sup> 確かに、クシーという字がクサンサスの頭文字であったことから、このミューとエプシロンも彼の名前の頭文字とも考えられるが、どうして彼の場合は二文字なのか、良く分からない。

このミューとエプシロンについては他の解釈が可能であると思われる。一つには、これらは、すぐ直前に登場した写本の項の番号を示すエプシロンとミュウの順番を単に逆にしたものかも知れない。また、二つ目の解釈として、ミューとエプシロンが合わさった‘ $\mu\epsilon$ ’はギリシャ語の一人称目的格（「私を」、つまり、英語の‘me’に相当）であるので、これらは固有名詞の頭文字ではなく、一般的に本人（自分）を指す単語に過ぎないとも取れる。<sup>5</sup>

さらに、この作品中の複数の語り手「私」（“I”）についても同じようなことが言える。つまり、81行から104行にかけてテオティパスの注釈が挿入されている。この「注釈」（“glossa”）はラテン語をそのまま使っており、英語では‘gloss’というが、写本の行間や欄外等へ書きこんだ注釈である。その際、「私はテオティパスの注釈を与える。」（“I give the glossa of Theotypas.”）といった「私」（“I”）とはいったい誰なのか。パンフィラックス、フィーバス、写本の現在の所有者、あるいはその他の人者等が考えられるが、特定は不可能である。

同様なことが、この詩の最後の部分（666-86）の語り手についても言える。まずその部分を全文引用してみよう。

〔ケリンサスが読んで、黙想した。ある人がこれを付け加えた。

「仮にあなたが主張するようにキリストが人々の間で単なる人間、

最初にして最善ではあるが、それ以上のものでないとすれば、

彼の人生の報いとしては、今も永遠に彼を全ての人の中で最も惨めな者とみなせ。

見よ！彼自身は人生を愛とみなし、愛を彼が愛しておられた一人ひとりの魂の中に入り、満たし、一つとなるべきものと考えていた。

人の喜びのゆえにかく多く為されたように、彼ゆえの全ての人々の喜びも大きくあれ。

ああ、似つかわしい報いを受けて、彼は逝った。  
 しかし、この時までには多くの魂が開放された、  
 そして、非常に多くの者が今なお生きて残された、  
 否、もし彼の来臨がしばらくの間遅れるとしても、  
 例えばもう十年（いや、ある者は十二年と算出しているが）、  
 両手の指の数だけの間、この世の終わるであろうその日に、  
 花嫁一人ひとりに対する花婿のように、彼が全ての人と、  
 また、パンフィラックスたる私と、ヨハネたる彼と、  
 一体となるであろうというキリストの言葉を守り続けている幾百もの魂が、  
 見出されないかどうか、見て欲しい。  
 単なる人にこれが出来ようか。  
 しかし、キリストは言われた、このことをするために彼は生きかつ死んだ、と。  
 それゆえ、キリストを無限の神と呼べ、さもなければ、敗残の者と。」

しかし、敗北したのはケリントスであった。]

(665-86)

この個所は「ある人が付け加えた」(“one added this”)言葉であるが、当時の異端者ケリントスに対して述べられた護教的文言である。その「ある人」が誰であるかは確かではないが、「パンフィラックスである私と」(“With me as Pamphlax”)とあるので、語り手はパンフィラックスと考えるのが順当であろうが、この句は他に「パンフィラックスのように私と」とも取れるので、最終的な決定は出来ない。

さらに、問題を複雑にする要素が含まれている。それは、その直前の「ケリントスが読んで、黙想した。」(“Cerinthus read and mused;”)という一句である。ケリントスが老ヨハネの独白の記録を読んで、黙想にふけた、という意味であるが、そうであれば、この写本は少なくとも一時的には彼の手中にあったと考えられ、彼によって文書が改竄された可能性も出てくる。この点を考察する前にケリントスがどのような異端派の創始者であったかを見てみたい。

実は、ケリントスはこの詩のもっと前の段階で「エビオン」と共に次のように登場している。

このように真理に触れ、手で触った私にとって一つの障害となったローマ人の手に下げた槍は今やある新しい抜け目のない舌の取り繕いであると判明した。  
 このエビオン、このケリントス、あるいは彼らの仲間である。  
 ついに「我らのキリストを救え」という叫び声が迫って来ていた。

(326-30)

ここに言及されているエビオンはエウセビオスの『教会史』の中に登場する。<sup>6</sup> ブラウニングの蔵書の中には、R. ステファヌス編集のギリシャ語版『教会史』(Bishop of Caesarea Eusebius Pamphill, *Ecclesiasticae Historiae*. Greek, edited by R. Stephanus, 2 parts in 1 vol, Paris, 1544)が含まれており、その表題紙にはブラウニングによって“R. & E. B. Browning”と記されている。<sup>7</sup> さらに、彼の妻であるエリザベス・バレットによって他の十数頁に短い書き入れがなされている。彼女は1861年に亡くなっているため、これらのことは、ブラウニングが「荒野の死」を発表した1864年以前に『教会史』がブラウニングとエリザベス・バレットの蔵書に加えられ、ブラウニングが『教

会史』を読んでいた証左となる。

なお、『教会史』の著者エウセビウスに関しては不明の点も多いが、紀元260年頃パレスチナに生まれ、340年頃没したようである。<sup>8</sup> 彼はパレスチナの海沿いの町カエサリアで受洗した後、キリスト教教理を学んだ。若き日にドーロテオス（？-303年）の聖書講解を聞き、さらに、オリゲネスの弟子にあたる聖書学者パンフィロス（240-309年）に私淑して、彼を生涯の師と仰いだ。後年、彼はこの地でキリスト教徒の殉教者を目撃し、また、教会の長老、監督をつとめた。彼が「カエサリアのエウセビオス」と呼ばれるのはそのためである。また、彼は師パンフィロスに息子同然に可愛がられたので「パンフィロスの〔息子〕エウセビオス」という異名で呼ばれることもあった。なお、このパンフィロスという名と、ヨハネの架空の弟子パンフィラックスの名との類似性は注目に値すると思う。

さて、上の引用で言及された「エビオン」とは個人名ではなく、ヘブライ語で「貧しい（者）」という意味であり、ユダヤ人キリスト教の一派である。『旧約新約聖書大辞典』によると「通常エビオン派として知られているのはユダヤ主義の強いパリサイのエビオン派」であるとされ、独特なキリスト論を持っていた。<sup>9</sup> すなわち、処女降誕を否定し、イエスはマリアとヨセフから生まれた普通の子供であり、ヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼を受けた時、キリストが鳩の形をとってイエスに宿り、十字架の死の前にキリストが天に去り、イエスのみが死んで復活した、と考えていた。

エウセビウスの『教会史』によれば、初代教会には悪魔の力も働いていたが、キリストへの献身者を惑わすために悪魔はエビオン派を用いた。彼らはキリストについての「低俗な見解」を持っていた。なぜなら、彼らが「その方はマリアとその性的交わりから生まれたが、徳を積んで義とされた貧しい普通の人間で、それ以上ではなかった」と考え、キリストに対する信仰だけでは救われないとして「律法の完全な遵守」を強調した。このようにキリストを「普通の人間」と考えたことに特徴がある。<sup>10</sup>

また、ケリントスについて『キリスト教大事典』は、彼のことを「ユダヤ人キリスト者、グノーシスエビオン主義的異端者」として、こう説明を加えている。<sup>11</sup> ケリントスは神的キリストと人間イエスを分離して、いわゆる「養子論」の立場を取る。イエスは単なる一人の人間であって、洗礼に際してキリスト、すなわち、高次の神的力が彼の上に降った。しかし、その神的力、キリストは十字架にかかる前に天に帰り、結局人間イエスだけが残って受難し、復活した。このイエスは単なる偉人にすぎない、とされる。イレナイウスの『異端反駁』は、「ヨハネによる福音書」はケリントスを論駁するためにヨハネが書いたと伝えている。「荒野の死」の中でも、ヨハネは「忘れられたか誤って伝えられた主の生涯の多くを忍耐強く語った」（166-7）とあるが、それはケリントスによって「誤って伝えられた」異端説に対抗するために「ヨハネによる福音書」を書いたというイレナイウスの見解を反映しているかも知れない。

これらのことから、エビオン派とケリントスはキリスト論に関して、ほぼ同一の見解を有していたことが分かる。この点を踏まえて上の引用を読み直してみると、そこには歴史的ケリントスのキリスト論が忠実に反映されている。ここで、「あなた」（“thou”）とはケリントスを指しているが、キリストは唯の人（“mere man”）であって、人類の最善の人ではあるがそれ以上ではない、とケリントスが主張した、とされている。

また、『教会史』は次のようなディオニシウスの証言を載せている。

「一方、その名に因みケリントス派と呼ばれるものを創始したケリントス（ケリントス）は、自分のでっちあげたものに、名誉ある名をつけようと望んだ。彼の教えた教義はクリストスの王国が地上に現れるというものだった。彼は現世的生活を好み、骨の髄まで肉欲主義者だったので、そ

れが欲望と胃袋の満足によって、すなわち飲食や同衾、あるいは、もっと穏やかな形で供されられると思われる饗宴や犠牲、犠牲獣の屠殺などによって実現されると夢見ていた。」<sup>12</sup>

さらに、『教会史』によると、使徒ヨハネの弟子ポリュカルポスは、ある時、使徒ヨハネが浴場に入っていた時、彼はケリントスが入って来るのを見かけて外に飛び出した。ケリントスと同じ屋根の下に居る事に耐えられなかったからである。その時、彼は叫んで、『さあ、逃げよう。浴場が崩れ落ちるぞ。真理の敵ケリントスが中にいるからだ!』と言ったと伝えている。<sup>13</sup> また、『教会史』は、ケリントスが「偉大な使徒の作と称した『黙示録』を利用し、天使たちから自分に示されたと偽り、奇跡物語を私たちに紹介した。」とのガイウスの言葉と、初期キリスト教徒の一部には「ヨハネの黙示録」の著者が使徒ヨハネではなくケリントスであるとの意見が存在したというディオニシオスの証言を引用している。<sup>14</sup> このことを考慮に入れると、一時的にせよケリントスの手にあったこの写本が何らかの改竄を受けた可能性は十分考えられることである。

このように考察を進めて来ると、ヨハネの独白が書かれている写本の描写は極めて高い歴史的現実性を与えるものであるが、その著者あるいは口述者、また、写本の所有者等の自己同一性はどこまでいっても決定できないようになっている。しかし、この著者の決定不可能性は、それゆえに一層歴史的写本文書の現実を反映しているとも言える。例えば、「ヨハネによる福音書」に関しても、今現在もその著者が誰であったかは論争中で、確かな決定はなされていないのである。この第四福音書について、「初代教会の伝承も、使徒ヨハネを実質的な著者とみなしても、福音書記者自身と断定していない。」<sup>15</sup> 具体的に言えば、最も信頼できる証言者であるイレナイウスは、『教会史』の中で第四福音書（「ヨハネによる福音書」）について、「主の弟子で、主の胸に寄りかかりさえしたヨーアンネース（ヨハネ）も、アジア（アジア）のエフェソス（エペソ）に滞在したとき、福音書を公にした」と語っている。<sup>16</sup> ここで「公にした」の原語は「エクセドケ」というギリシャ語であり、「出した」という意味であって、「書いた」とは言っていないことは、注目すべき点である。<sup>17</sup> ヨハネがガリラヤ湖畔で仕事をしていた漁師であったことを勘案すれば、そこに語られた実質はヨハネのものであったとしても、その内容を威厳のあるギリシャ語に文章化したのは、ヨハネから口授された他の教養ある筆記者であったと考えても何の不思議もない。実際、パウロやペテロが代筆者を使ったことは新約聖書本文からも明らかである。<sup>18</sup> つまり、写本の著者についてはその自己同一性が決定不可能であることの方が、「ヨハネによる福音書」の著者問題に関する現代聖書学の見解に近いとも言えるので、逆説的に歴史的現実性があると考えられる。

さて次に、この詩の時代設定と場面設定についてその歴史的現実性を論じてみたい。結論的に言えば、この詩の時代設定は使徒ヨハネに関する古くからの伝承に基づいている。伝承によれば、紀元42年頃、ヘロデ・アグリッパI世がユダヤのキリスト教徒を迫害した時、ヨハネはイエスの母マリアと共に迫害をのがれて、このエペソに來た。その後、ヨハネはドミティアヌス帝の時に福音を証したために有罪の判決を受けてパトモス島に流されが、同帝の死後、島から召還され、トラヤヌス帝（98－117年在位）の時代まで生き延びて紀元百年頃、エペソで死んだと伝えられている。<sup>19</sup> 『教会史』は、アジアで眠っている偉大な教会の指導者たちの中に「主の胸によりかかり、〔後に〕黄金の冠をかぶった祭司にして殉教者・教師となったエフェソス（エペソ）に眠るヨーアンネース（ヨハネ）もいる。」と伝えている。<sup>20</sup> ヨハネの死後、彼の遺志により彼はエペソのアヤスルクの丘に埋葬された。最初は質素な納骨堂（martyrion）が立っているだけであったが、紀元四、五世紀頃、彼の墓の上にバシリカ風の教会堂（「聖ヨハネの教会」）が作られ、さらに六世紀半ば頃、ユスティニアヌス帝（527－65年在位）が壊れかけていた教会堂をさらに大きく再建した。現在もその教会跡がアヤスルクの丘にあり、その中央に周りに四本の柱を残すヨハネの墓がある。<sup>21</sup>

このような伝承を踏まえて、この詩の場面は紀元百年頃のエペソ近くの荒野であると想定される。



当時のローマ皇帝トラヤヌスの勅令（“the decree”）が発せられた後、迫害を逃れて、荒野の洞窟に身を隠してから既に六〇日が過ぎ、ヨハネは最期の時を迎えようとしている。ヨハネ先生に従った五人の弟子、パンフィラックス、カンサス、バレンズ、少年、そしてバクトリア人は何とか先生の意識を回復させて、最後の遺訓を聞こうとする。弟子たちはヨハネの口にブドウ酒を注ぎ、手をさすり、祈りをささげたが、ヨハネは依然として眠ったままである。その時、少年は急に立ちあがり、秘密の部屋より聖句の刻まれた鉛の板を持ってきて、あたかも彼がその言葉を初めて言うかのように「わたしはよみがえりであり、命である」（「ヨハネによる福音書」11章25節）と叫ぶ。その霊感的な聖句の朗読にヨハネはハッと目を大きく開き、弟子たちを見回した。洞窟の外ではバクトリア人が山羊を連れて見張りをしている。もし追っ手が来たら山羊と共に自分の命をも与えて、中にいる先生や弟子たちを守ろうとしたのだった。このような熱い師弟愛、兄弟愛の中でヨハネは目覚め、これまでの恩寵を回顧しつつ、キリストの愛と力を証し始めた。

ここに言及された勅令とはトラヤヌス帝のものと考えられるが、歴史的には特定できない。しかし、“decree”に定冠詞“the”がついていることから、ある特定の勅令を示唆している。この時代のキリスト教徒の状況を『教会史』に見ると、やはり激しい迫害が続いていた。殉教者の多さに不安を覚えたプリニウス・セクンドスは、書簡の中で、信仰のゆえに処刑された数を皇帝に報告し、キリスト教徒は朝早く起きてキリストを神のようにほめたたえている以外は、きちんと法律を遵守していると述べている。それに対して、トラヤヌスはキリスト教徒を搜索してはならず、たまたま発見された場合だけ罰するようという趣旨の勅令を出した。これで、迫害はある程度は緩和されたが、局地的な迫害は続いたとある。<sup>22</sup>これが『教会史』が伝える「勅令」だが、この詩の中で想定されている勅令はもっと過激なもの、キリスト教徒を見つけしだい捕縛し、処刑するようにとのものであったと考えられる。

いずれにせよ、キリスト教徒にとっては試練の時代が続いており、迫害をのがれた老ヨハネと弟子たちは、とある洞窟に身を隠している。こういった洞窟は小アジアに数多く存在するが、有名なものに、シリアのアンテオケ（現在はトルコ領）にあるペテロの洞窟教会がある。これはシルピウス山のふもとにある洞窟をくりぬいて出来たものであるが、周囲の岸壁に洞穴があつて、それが見張り台になっていた。怪しい人が来ると見張りが洞窟内の信者に危険を知らせ、信者たちは秘密の間道を通って山に逃げたという。実際、洞窟教会の左手奥に間道への入り口の穴が開いている。<sup>23</sup>

また、エペソにも「七人の眠れる若者の洞窟」の伝説がある。セルチュクのパナジル山の麓にある洞窟に、三世紀の中頃、七人のキリスト教徒の若者が迫害の手を逃れて、犬をつれて隠れ住んだと伝えられている。しかし、ローマ皇帝デキウス（249-51年在位）の治世下に、彼らは捕らえられて処刑された。だが、彼らは二百年の後に生き返ったという。この復活後、キリスト教徒はこの場所に葬られることを憧れるようになり、近くに何千もの墓地や修道院が作られ、やがて巡礼地となった。これは十二世紀まで続いたらしい。また、この七人は処刑されたのではなく、眠っている間に二百年という年月が経過していた、という説もある。<sup>24</sup>

この詩の中では、バクトリア人が山羊を連れて番をしていて、いざという時には山羊と共に自分の生命をも与えて、中に居る者たちを護ろうとしたことから、この洞窟には逃げ道が無かったことが分かる。迫害の勅令が出されて急遽逃げて来て洞窟に隠れたのであるから、逃げ道を作る余裕はなかったであろう。

ただ、この洞窟には奥の部屋と共に秘密の部屋があつて、そこに福音書の一節が刻まれた鉛板が保存されていた。

さて、その洞窟の中で目覚めたヨハネが最初に語ったのは、兄弟ヤコブとペテロのことであつた。二人は既に壮烈な殉教の死をとげて天に逝ってしまった。今やキリストの生涯を全て知っており、

全てを思い出せる者はヨハネ一人になっていた。ヨハネは自分一人がなぜ地上に残されたのかを思い、心に責められることがあった。証し(マルチュリア)という言葉が殉教をも意味した時代に、直接イエス・キリストに触れることもなかった多くの幼い子供やおやかな婦人たちが、福音が語られるのを聞くと、「明るく笑いつつ十字架を負い、また、神に感謝して燃える衣」(315-6)に身をつつんで死んでいったのに、キリストの特愛の弟子であった自分がどうして九十歳代まで生き延びているのかという思いが心を苛んでいた。

このように、直接イエスに触れたこともなかった者たちが次々と殉教の死を遂げていったことが『教会史』の至る所に記されている。一例を挙げると、アンテオケでペテロの監督職を継いだイグナティウスはキリストの証しをしたためにシリアからローマに送られ、獣の餌食となった。<sup>25</sup> これは、詩中のクサンサスの運命を連想させる。また、殉教者の聖なる熱意について、「その時男や女たちは、名状しがたいある聖なる熱意によって火の中に飛び込んだという。」と述べ、<sup>26</sup> さらに、殉教者の恐れを取り除く全き愛について、「キリストス(キリスト)を身に帯びている殉教者たちは、より大きな賜物を熱心に求めて、あらゆる苦しみやあらゆる器具の拷問に一度だけでなく、ある場合には二度も耐えました。衛兵どもは互いにあらゆる脅迫を、言葉だけでなく行為でも競い合いましたが、彼らは決意を翻しませんでした。全き愛は恐れを取り除くからです。」と記している。<sup>27</sup>

このように、自分一人が生き延びているという自責の念を感じながらも、ヨハネには新たな思いが湧いて来た。今や、自分が残されたのは良き事のためであった。キリストの愛が自分を通してもっと多くの人々に伝わるためであったと直感する。生命の言なるキリストをその目で見、その手でつらつら触れた者は自分一人しかいないとの自覚に彼は目覚める。

そこで、ヨハネは言う、「最初は点と思ったことが、今や星々であるのを知り、それを私が書いた福音書に書きとめた」(174-5)と。福音が語られた初期には、小さくつまらなく見えたこと、また矛盾に満ちてその意味を解しかねたことが、老年に達した今、夜空の星のごとく重大な出来事であったことを魂が直感し、福音書に全てを書きつけた。それ故に、「ヨハネによる福音書」は他の三つの共観福音書とは趣きを異にしている。

『教会史』の中でクレメンスは第四福音書の特徴について、「しかし、最後のヨハネは外面的な事実が〔三つの〕福音書の中ですでに説明されているのを知っていたので、弟子たちに勧められ、そして霊につき動かされたとき、霊的な福音書を書いた」と述べている。<sup>28</sup> 長い年月の中で単純な出来事と思えた事柄がヨハネの心の中で成長し、その「新しい意義」を知って書かれたので、ヨハネ伝は福音の霊的な奥義を詳しく伝える内容になっている。

さらに、ヨハネの独白は続く。自分は今、目覚めるまで深い眠りの中にいたが、ある声を聞いた。それは見知らぬ国のまだ生まれていない人々の声であった。彼らは「いったいヨハネという者がいたのか。彼は見たと言ったのか。彼が何を見たかを尋ねる前に、我々に確信させよ」と言う。

この「まだ生まれぬ人々」とは、十九世紀に登場して来るシュトラウスやルナン等の高等批評家のことを示唆している。彼らは聖書の歴史的研究から、聖書本文の歴史性信憑性に疑問を投げかけ、特に「ヨハネによる福音書」を槍玉に挙げ、はたして使徒ヨハネがこの第四福音書を本当に書いたのか、そもそもヨハネという人が現実に存在したのか、と疑った。

これに対し、ヨハネは次のように語る。

私にとってあの話、私は「それはあった」と書いたあの生涯と死とは、私にとって今あることなのだ。

ここに今ある。私は他の何ものをも知らない。

神は今も、神の力が初めに創り給うた世界におられるではないか。

神の愛は地上に悪が行われるとき、目に見ゆる様で、なおも悪と闘いつつあるではないか。

(208-13)

ヨハネはイエス・キリストの生涯を「それはあった」と書いた。しかし、そのキリストの生涯と十字架の死はヨハネにとっては今あることなのだ。それは決して過去の出来事ではない。高等批評家たちの疑惑にもかかわらず、このキリストの生涯（生命）は今もなお続いて、自分の目の前にあることなのだ、とヨハネは言う。時代を超えて、目ある者には神の愛が今も悪と闘いつつあるのが見える、というのが老ヨハネの主張であった。

私は力を見た。今や、かつて弱かりし愛が再び力を占めるのを見る。

「私は見る」という言葉に、見よ！力と愛の御霊が人の魂の上を動き、彼の眼を開き、見ることを命じるのを実感する。

(221-5)

かつてヨハネは神の力を知っていた。しかし、今や、弱かりし愛がもう一度力を占めて愛と力が一つとなった現実をヨハネは体験した。愛と力の御霊が彼の魂の上に注がれる時、この真理がありありと見えるようにも感じられたのだった。

このようにまだ生まれていない人たち、つまり、高等批評家たちの疑念に対するヨハネの応答は、歴史（時間）を超え永遠に繋がる宗教体験として展開する。過去の歴史的出来事の信憑性については様々な疑問も生じるが、今現在、内的にキリストの生涯と死とを経験しつつある者には、それは永遠的出来事として把握できる。

だが、この詩の中で、ヨハネによって語られるこのような内的宗教体験は決して歴史性を失っていない。これまでの考察で明らかなように、ヨハネ独白は羊皮紙写本の中に記されている擬似キリスト教文献としての条件を備えており、また、この詩に描かれた時代背景、場面設定、異端者の名前、殉教者等は『教会史』の記述と密接に関連し、極めて高度な歴史的現実性を十分備えていると言える。

## 注

- 1) 「荒野の死」と『ソールデロ』のテキストとして、*Robert Browning: The Poems, Vol. I & II*, ed. John Pettigrew (Harmondsworth: Penguin Books, 1981) を使用した。また、「荒野の死」と高等批評の関係の詳細については、Makio Yoshikado, "Browning and Higher Criticism in 'A Death in the Desert'" (MA Thesis Submitted to the Department of English, Baylor U, 1986) 参照。
- 2) John Grube, "Sordello, Browning's Christian Epic." *English Studies in Canada* 4 : 4 (1978) : 418.
- 3) 日本聖書学研究所編『聖書外典偽典7 新約外典Ⅱ』（東京：教文館，1988）134-41.
- 4) 齋藤勇訳註『英米詩抄』（東京：開文社，1952）49; 岡田五作他編『キリスト教大事典』（東京：教文館，1983）511 参照。
- 5) 玉川直重『新約聖書ギリシャ語独習』（東京：キリスト新聞社，1999）352.
- 6) 以下『教会史』からの引用は全て秦剛平『教会史1-3』（東京：山本書店，1986-88）を使用した。また、Eusebius, *The History of the Church from Christ to Constantine*, trans. G. A. Wil-

- liamson (Harmondsworth: Penguin Books, 1965) を適宜参照した。
- 7) Philip Kelley and Betty A. Coley com., *The Browning Collection: A Reconstruction with Other Memorabilia* (Waco, Texas: Wedgestone P, 1984) 78.
  - 8) エウセビオスの生涯については『教会史1』238-72を参照した。
  - 9) 荒井献, 石田友雄編『旧約新約聖書大事典』(東京: 教文館, 1989) 201.
  - 10) 『教会史1』178.
  - 11) 岡田五作他編『キリスト教大事典』(東京: 教文館, 1983) 386.
  - 12) 『教会史1』180.
  - 13) 『教会史1』180.
  - 14) 『教会史1』179ならびに『教会史3』49.
  - 15) 増田誉雄他編『新聖書注解: 新約1』(東京: いのちのことば社, 1973) 441.
  - 16) 『教会史2』104-5.
  - 17) 『新聖書注解: 新約1』437.
  - 18) 「ローマ人への手紙」16章22節, 「ペテロ第一の手紙」5章12節参照。
  - 19) 『教会史1』161, 164, 166 参照。
  - 20) 『教会史1』184.
  - 21) ナジ・ケスケン『日本語版エフェソス』(Keskin Color Kartpostalcilik Ltd, 1998) 9, 18; Selahattin Erdemgil, *Ephesus Museum*, 133; Fatith Cimok, *A Guide to The Seven Churches* (Istanbul: A Turizm Yayinlari, 1998) 47-51 参照。
  - 22) 『教会史1』187-8.
  - 23) 牛山剛『トルコ・ギリシャ パウロの旅』(東京: ミルトス, 1989) 47.
  - 24) 『日本語版エフェソス』54; Selahattin 52 参照。
  - 25) 『教会史1』190.
  - 26) 『教会史3』93.
  - 27) 『教会史3』100.
  - 28) 『教会史2』174.

平成15年(2003)10月1日受理

平成15年(2003)12月25日発行